# 聖獄洞穴遺跡

後藤重巳

## Ⅰ はじめに

日本考古学協会内に洞穴遺跡特別調査委員会が設置された目的は、開放された平地での生活の前時代には、洞穴生活の時代が存在したこと、並びに洞穴遺跡が当時の原況を忠実に保存する可能性を多分に持つていること、などの理由からその遺跡、遺物を確認し、旧石器文化と縄文文化の関連性を究明することなどが要求されたことにあつた。①

本県南海部郡本匠村宇津津部落に所在する聖獄洞穴遺跡の調査はこの特別委の九州における初年度の試みとして行なわれたものである。

注 ① 八幡一郎「洞穴遺跡研究の必要性」『洞穴遺跡調査会報』第一号昭三七、六、二五

## Ⅱ 本調査までの経過

昭和三十六年秋、地元本匠村教育委員会諸方主事より、洞穴内に骨片が多量散在している由、連絡を得た別府大学考古学研究室では賀川光夫教授が早速現地踏査をこころみ、その結果、有望遺跡と認め、三十七年二月、賀川教授、後藤重巳の二人

で予備調査を行つた。この調査で洞穴中央部から数点の細石器を発見し、前縄文時代（後期旧石器）の注目すべき遺跡であることが判明早急な本格的調査が必要とされるに至つた。

本調査は、同年十一月七日から十五日までの九日間、洞穴遺跡特別調査委員会の主催で実施された。賀川光夫教授を団長に小片保新潟大教授が人骨担当、古生物担当の姫野忠臼杵高校教諭、別府大岩尾松美、後藤重巳がこれに加わり、同村青年団員の献身的な作業補助を受け、途中二日間東京教育大学八幡一郎教授（洞穴遺跡調査特別委員長）の指導のもとに行われた。

## Ⅲ　遺跡の立地と概観

大分県の南部、臼杵、津久見、佐伯地区から西南方向、九州山脈祖母山系の下部にのびる地質構造線を臼杵――八代線とよぶ。

この構造線は古生層よりなり、層中の石灰岩がこの地方では各所に露出し、その露頭の一部には鐘乳洞穴が存在する。

さて、佐伯市を貫流する番匠川はこの古生代の山地を浸蝕し、本匠村地区では極めて深い谷を形成し、各所に傾斜度の大きい磨崖を形造つている。

聖獄洞穴は、この番匠川の上流北岸を東西に走る石峠山――楯が岳――冠山――椿山系山地の東端、山頂部標高三六〇メートル強の場所に西南の方向に開口し、鐘乳洞活動を停止してやや時間を経過した一石灰岩洞穴である。

この洞穴は、全長五四メートル。洞床から天井まで高さは平均四メートルで、洞内の傾斜は入口から四〇メートルの地点で（十）二メートルであつた。洞内は左右に屈曲多く、入口から二〇メートルの地点に全洞を二分する大きな落石がある。

洞内にはおびただしい土砂の堆積があり、その層位は次の様に大別された。

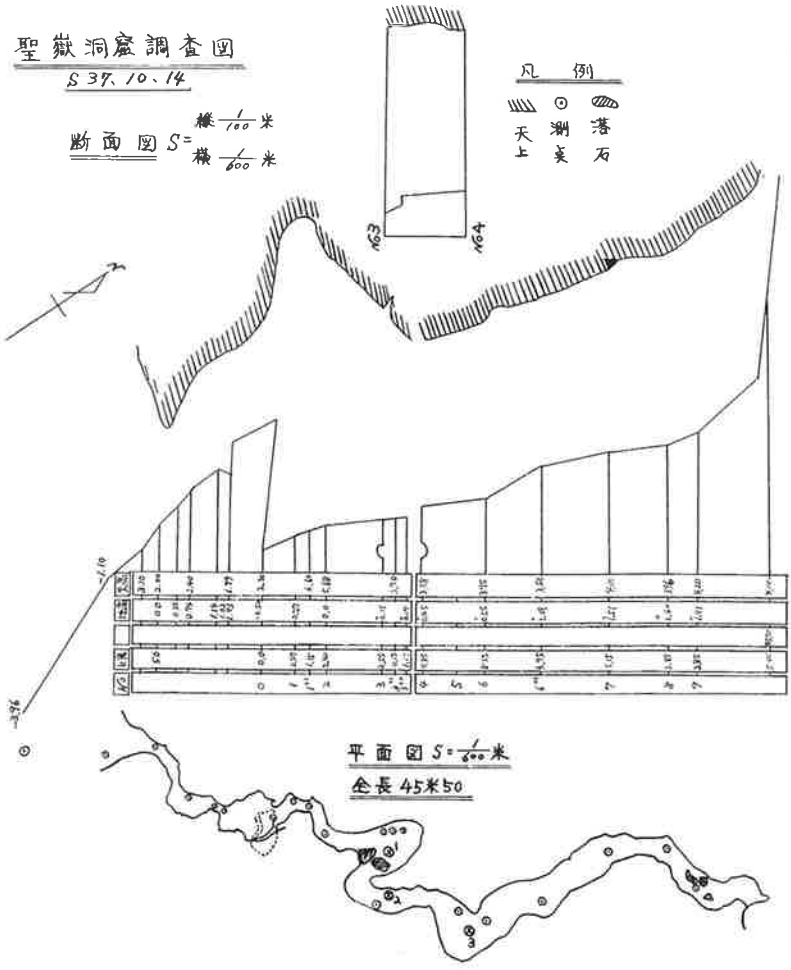
Ⅰ層――黒色表土層　（一〇～一五センチメートル）

Ⅱ層――粘質軟砂礫層（一五～二五センチメートル）

Ⅲ層――下部粘土層　（二メートル以上）

Ⅰ層は黒色の表土で比較的粘性に乏しく、かるい土壌の沖積層である。層中の歴史時代遺物（金属性品、唐、宋銭）の包含から中世以降に利用されたものと推定される。この層は洞内全体を占めるが、入口附近においてもつとも厚く洞奥部では流失のためか下部層が露出している。

Ⅱ層は本鐘乳洞穴が活動を停止した後、洞周囲の岩壁の亀裂から流入した土砂が堆積したものと考えられ、礫性を帯びている。層の上面、下面の間では若干土質に相異を見るところから、この層の堆積は数次にわたつているものと考




第１図　聖嶽洞穴展開図

えられた。

Ⅲ層成因は、この洞穴がかつて鐘乳洞として活動を行つていた時分、洞内にプールされていた水によつて沈澱堆積して生じたものらしく層中の粒子は極めて微細で緻密であつた。

Ⅲ層の層厚については、二メートル以上であることは確認されたが、洞の岩盤までの深さは計測し得なかつた。

以上の如く洞内の層位は大別して三層にわけることができる。

## Ⅲ　遺物の考察

前項の立地条件と概観を呈する聖獄洞穴遺跡において本調査までに発見された遺物として、石器、人骨、人骨加工の骨器などで、その数は必しも多くはないが、すべて貴重な資料を得ることができた。これら遺物はすべてⅡ層或はⅢ層において出土したもので、人骨が旧石器とともに出土されたことは本邦において最初の例であるといえる。

### 一、石　器

石器は数量的には極めて少なく、数点を得たにすぎない。これら石器の散布状況は、洞内のほぼ中央部、洞の屈折したやや広い場所において発見された。その一部は人骨利用の骨器を共伴し、他の地点ではやや離れて頭蓋骨後頭部の出土をみた。この点では遺物の大小を問わず、きわめて重要な資料がたまたま場所を同じくして発見され、その層位的所見も非常に興味深いものがあつた。即ち第Ⅲ層上面出土の石器は、

(1)　量的に少く、散布状態をなしている。

(2)　すべてが細石器で一部にコアをともない、ナイフ型石器を出土すること。

(3)　石器は少量のわりに種類が多様である。などの特徴があげられる。

(1)については「見落し」の可能性もある程度加味しなければならないが、その確率は問題とするに足りない数価と考えられ

るので、石器の数量は「絶対量の少」と断定した。

(2)石器の形態は次の如くに大別された。

イ、小形石刃（Micro Blade）

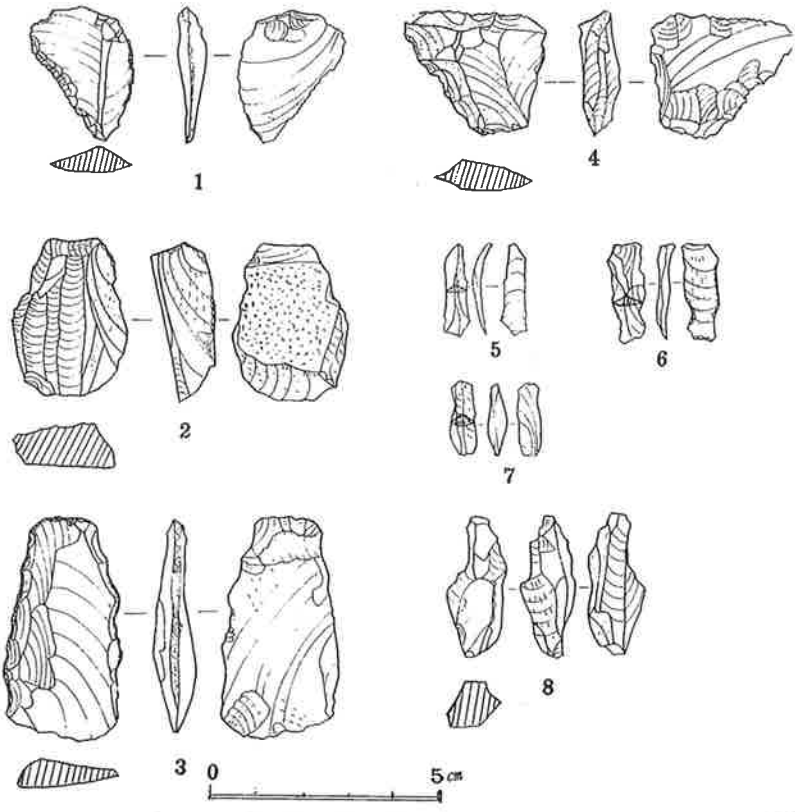
ロ、小形石核（Micro Core）

ハ、ナイフ形石器（Knife）

**石刃**は長さ二センチ程度の小形縦長の剝片で表面に一～二本の稜線が見られる。裏面は劈開面のままの平対面をなす。裏面上部にプラットホーム、バルブがある。側面は多少曲折或は湾曲しているなど各個体とも共通性を持たず不統一である。一部には、刃部に調整痕が認められるものもある。材質は阿蘇黒燿石を用いる。

**石核**は本洞穴においては、一点の例を見たのみである。出土地点は長洞の中央二地点でⅢ層上面から数個の石器とともに発見された。

阿蘇黒燿石を用い、高さ三・五センチ、巾二・五センチの大きさを持ち上端にプラットホームが見られる。裏面にはペブリを残し、その他の




第二図　石　器

三面から縦縞の剝離を行ない、数条の剝離面を残している。この剝離面の走行はプラットホームより垂直角をなしている。

**ナイフ型石器**出土した石器中第二図1、3、4などで、剝片の一部（両側線の一部）を加工して刃部を形成し、一辺を落して梯子状に加工（1、4）するもの、全体を短冊形に下部を巾広に形成(3)したものなど形態が必ずしも一致しない。良質の黒燿石を使用した石器である。

(3)形態の不統一性については、上記少量多類にわたる遺物で明確な通り、石質を同じくするばかりで、その技法、形態、大きさは各個体とも何ら共通性を持たない。

これらのうちの石器、一図2地点からは2、5、6、7、8が発見され、3地点からは残り1、3、4が出土した。

出土状態はⅢ層定位後或はⅢ層形成過程における洞内搬入遺物であると考えられ、その後洞内の上層堆積などで若干の移動があつたものと推測される。なお、遺物の多様性は本洞が生活跡でなく、埋葬時などの際などに放置された遺物の残存であると思われる。

## 二、人　骨

人骨片の発見は層位的に完全に新、旧に二分された。すなわち、それぞれ第Ⅰ層と第Ⅲ層上面である。

第Ⅰ層中には、おびただしい人骨片の散布を見たが、先述の通りⅠ層には金属器製品など中世遺物の包含を見、歴史時代より古くは逆上り難い。

第Ⅱ層は、間層として完全な無遺物状態を示していた。

第Ⅲ層上部からは

イ、足骨（距骨）

ロ、腰椎

ハ、頭蓋骨（後頭部）

が発見された。

足骨（距骨）は人骨担当の小片保教授の計測によると、この骨の蹲距面の形状は現在人と著しい相異を持つており、この形状から考えられることは、前屈位の行動の多い骨格の者だろうと推察した。第一層からも多数の人骨片の出土をみたが、Ⅲ層上層出土の距骨を見出し難い。したがつてⅠ、Ⅲ層の距骨は明確な相異を持つことが確認された。

腰骨については、部分的なもので、これのみでは骨相を判じ得なかつた。

頭蓋骨は興味ある資料として注目された。この頭蓋骨は後頭部に属し、発見例は一点のみであつた。

発見位置は中央部の大落石の近くの一図1地点であり、層位的に第Ⅲ層上部であつた。

この骨の計測は現在なお続けられているが、大略の数価を示すと、骨全面の厚さは平均一三～一四センチを示し、現在人の計測値四～五センチに比して極めて厚いものであることが判る。

頭頂部へのカーブなどから、偏平な形状の頭骨と考えられた。

形状のみから説明するならば、「奇体質の頭骨」との考え方も成立しようが、

一、細石器と共伴すること。

一、他にⅢ層上位置より距骨の出土をみ、これが上部Ⅰ層出土人骨と明かに計測値を異にすること。

一、化石化の程度がかなり進んでいること。

一、人骨器を共伴すること。

などから一応旧石器共伴遺骸と考えることができ、今後に大きな課題を提起する資料と推察される。いづれ小片教授により詳報される筈である。

## 三、骨　器

第Ⅲ層中からは石器、人骨とともに人骨利用の道具二点が発見された。

位置は一図3地区である。

その一点は脛骨の先端部を焼いてドリル状に研いだもので全長（二〇㎜）である。当脛骨の断面は三角状をなし、骨の形態から現代人と著しく異なるものであつた。

他の一点は橈骨の先端を同じく焼いて偏平なヘラ状に加工したもので全長（一七㎜）である。

以上骨器は二例を見たにすぎないが、それが人骨片加工である点に注目される。

## V 結　論

聖獄洞穴は左の如く多くの問題を提起したが、

(1) 洞穴利用の問題

(2) 細石器の問題

(3) 加工人骨の問題

(4) 第Ⅲ層人骨の絶対年代の問題

など、大いに注目をあび、また早急に解決されなければならない課題であろう。

(1)の問題では洞穴利用に二つの目的がとり上げられる。すなわち、生活の場と埋葬墓地としての場との両者である。前者の例としては、最近各地で特別委により調査されている洞穴の大部分がこれに相当しよう。身近な例としては、時代はやや下るかも知れないが、長崎県吉井町福井洞穴①、大分県速見郡山香町川原田遺跡②が好例である。これら生活跡として定義づけられる場合、その絶対条件として、生活遺物を持たなければならない。事実、前記各遺跡においては、多量の土器、石器、骨角器を包含する文化層が存在する。

この点から見る時、聖獄洞穴においては生活遺物の発見例が余りに少量であつた。この事実は当遺跡が生活跡としての可能

性を否定される大きい理由である。

聖嶽洞穴が埋葬墓地的要素を持つと考えられる他の理由として、活動停止後の深度の大きい洞内の条件が上げられる。プール状態で沈澱堆積した粒子の極めて微密な土質と密封された洞穴内は湿潤性が大きく、このことから当時の洞穴は生活の場としては最悪の条件であつたと考えられる。墓地の例として県下における洞穴遺跡で時代は下るが、大野郡大恩寺③、草木両④洞穴では生活遺物が少く埋葬地と結論された。

以上の諸点から、当洞穴の生活跡と見ることは否定的であり、むしろ埋葬地的場所と考えるのが妥当であろう。

(2)の問題では前項に記した

一、数量の僅少性

二、剝片利用の細石器

三、形態の不統一

が特に上げられる。

数点を数えた石器が各個体ともどもその技法、形態に特性を持つことについてはその理由は明確でない。

石器の数量の問題は、この遺跡が生活の場ではなかつたと見ることで解明されようが、石器が死体と共に搬入されたとしても、形態の不統一の問題は不可解に終る。

ここで一つの疑問は石器の中にマイクロ・コアーが一例であるが存在することである。

本来コアーは石器製作の過程で生ずるもので、道具としての石器そのもの自体ではない。この事実は洞内において「石器製作」の可能性――つまり埋葬地としての利用以外の利用を懸念させる。

いずれにしろ、石器の問題は今後に大きい疑問と課題を残すものであろう。

(3)加工人骨器に関しては、出土層序、骨の形態等から、第Ⅲ層人骨と同期のものと見ることができた。

この資料は「人骨を加工する」と言う問題が意義が持たれる。

「食人風習の事実に関連か」の問題とともに、道具としてよりはむしろ原始信仰の形態、呪術資料としての価値を持ちそうである。

死体埋葬に伴う呪法資料として、今後の発見例に期待が持たれる。

第Ⅲ層人骨については、目下、小片教授により精密な計測が行なわれている。

第Ⅰ層人骨は金属製品を共伴する事実から、歴史時代人骨と断定されたが、この新らしい人骨との弗素による比較年代割り出しにより絶対年代の計測が可能になろう。

尚Ⅲ層人骨については、いずれ小片教授により詳報される筈である。

注　①　鎌木義昌、芹沢長介「長崎県福井洞穴の第二次調査略報」『洞穴遺跡調査会会報』第六号昭三八、四、二五

②　賀川光夫「大分県川原田洞穴調査概報」　『　同　右　』第七号昭三八、七、二五

③④　賀川光夫「大分県大野郡朝地町稲荷、草木洞穴概報」　『　同　右　』第九号昭三八、一〇、二五

（この研究は文部省科学研究費による）